

# 『成実論』における色蘊の定義

荒 井 裕 明

## I

筆者は本論集第4号において「『成実論』における五蘊の順序」と題する若干の考察を行った<sup>1)</sup>。それは『成実論』の中で説明されている五蘊の順序が、ニカーヤ、阿含及びアビダルマ文献などに見られる伝統的な「色受想行識」という順序とは異り、「色識想受行」とされている点に注目して、その説明の順序についての根拠を論じたものであった。

その考察の中で、『成実論』は心所法を認めず、従って、心と心所法の相応という考え方も否定した上で、あらゆる心理現象を単一の心の次第生起によって説明するという特徴を持ち、その立場から煩惱の生起の過程を論ずる際に、伝統的な五蘊とは異なる順序によって説明する必要があったのであらうと述べた。

ところで、『成実論』が主張する様な心の次第生起という考え方は、説一切有部（以下、有部と略す）のアビダルマ文献に見られる心心所相応説とは相反するものである。そもそも、『成実論』の著者であるハリヴァルマン (Harivarman) の仏教研究は、有部の根本論書である『発智論』(=『八犍度論』)の批判的な研究から始ったと伝えられており<sup>2)</sup>、その事情からも推測される様に『成実論』には有部に対する批判と受け取ることの出来る記述がしばしば見出される。

そこで本稿においては、五蘊の中の色蘊の定義に注目して、有部の教義との比較を通して『成実論』における色蘊論の特徴について論じてみたい。

## II

『成実論』の色蘊の定義は、苦諦聚の中に示されている。論の構成の観点から言えば、『成実論』は苦集滅道という四諦説に基くものであり、それは本論の中で、成実の実とは四諦のことであると説明されていることから知る事ができる<sup>3)</sup>。

一方、有部のアビダルマ文献の中にも四諦説に基く構成のものがあることが指摘されているが、それらは『阿毘曇心論』、『阿毘曇心論経』、『雑阿毘曇心論』、『阿毘達磨俱舍論』などの比較的後期の文献であり、『大毘婆沙論』やいわゆる六足発智と称される諸文献などは全く別の体裁をとっている<sup>4)</sup>。この様に論の構成上は同じテーマに立脚する文献が有部に存在するのであるが、『成実論』の特徴として特に指摘し得るのは、この論が二諦によって説かれているという点である。つまり、苦諦聚に説かれている色などの五蘊に関する議論等は世俗諦のものであり、世俗諦において色などの五蘊が存在すると論じられているけれども、第一義諦においては五蘊などの諸法はすべて空であるとされているのである<sup>5)</sup>。一方、滅諦聚に説かれている仮名心、法心、空心という三心の滅などの所説は、第一義諦に属するものと言ふことができる。要するに、四諦のうち苦諦と集諦については世俗諦の観点から、滅諦と道諦については第一義諦の観点から論じられていると見ることができよう。

以上の点を念頭に置いて、まず、『成実論』の色蘊の定義を見てみよう。

色陰者、謂四大及四大所因成法。亦、因四大所成法、総名為色。四大者、地水火風。因色香味触故、成四大。因此四大、成眼等五根。此等相触故、有声。地者、色等集会、堅多故名地。如是湿多故名水。熱多故名火。輕動多故名風。眼根者、但縁色、眼識所依、及同性不依時、皆名為眼根。余四根亦如是。色者、但眼識所縁、及同性不縁時、是名為色。香味触亦如是。是等相触故、有声<sup>6)</sup>。

これが苦諦聚の「色相品」に見られる色蘊の定義である。まず、冒頭に色蘊（＝色陰）とは、「四大及四大所因成法」と言われているが、この表現はニカーヤ、阿含という原始経典の中で、「色は四大種 (cattāri mahābhūtāni) 及び四大種所造色 (catunnam mahābhūtānam upādāya rūpaṃ) と述べられていることと一致する。そして、この記述はアビダルマ諸文献においても見出される<sup>7)</sup>。今、『成実論』の「四大所因成法」の原語が何であったのか直接知ることにはできないが、内容的には上述の「四大種所造色」に相当すると見て差し支えないであろう<sup>8)</sup>。したがって、「四大及四大所因成法（＝四大種所造色）」という表現は、ニカーヤ、阿含に見られる伝統的な色蘊の定義を踏襲したものといえよう。

ところで、有部のアビダルマ文献の中でも現存中最も初期に属すとされる『集異

『門足論』における色蘊の説明に次の様な記述がある。

此中諸所有色者、云何名為諸所有色。答、尽所有色。謂四大種及四大種所造諸色。如是名為諸所有色。復次、尽所有色、謂十色処及法処所摂色。如是名為諸所有色<sup>9)</sup>。

ここでは上述の如き伝統的な「四大種及四大種所造色」の定義を採用しながらも、それとは別に、「十色処及法処所摂色」という説明を付け加えている。『集異門足論』よりも遅く成立したとされる『品類足論』には次の様にある。

色云何。謂諸所有色、一切四大種及四大種所造色。四大種者、謂地界水界火界風界。所造色者、謂眼根耳根鼻根舌根身根、色香味触、所触一分、及無表色<sup>10)</sup>。

この『品類足論』の記述によれば、『集異門足論』の言う「十色処」とは「眼等の五根と色等の五境」のことであるが、そのうち、触境については能造である四大種（地水火風）が触処所摂の色としてそれに含まれるので、所造色としての触境は四大種以外の部分であって全部ではないので、ここに「所触一分」と言われている。そして、「法処所摂色」とは「無表色」であると言われている。この様な11種の色法があると主張するのは有部の特徴であり、『大毘婆沙論』にも次の様に述べられている。

問、色蘊云何。答、如契經說、諸所有色皆是四大種及四大種所造。……阿毘達磨作是說言、云何色蘊、謂十色処及法処所摂色、是名色蘊<sup>11)</sup>。

ここには、ニカーヤ、阿含に見られる伝統的な定義と区別して、「十色処及法処所摂色」と定義することはアビダルマ独自のものであることを明確に述べている。しかし、『大毘婆沙論』では色蘊の定義として3説が併記されている段階である<sup>12)</sup>。それが『俱舍論』に到るとアビダルマの定義だけが示されることになる。

rūpaṃ pañcendriyāṇy arthāḥ pañcāvijñaptir eva ca (ch. I, k. 9 ab)<sup>13)</sup>

頌曰、色者唯五根、五境及無表<sup>14)</sup>。

有部の色蘊の定義にはこの様な変遷があることが知られるが、「十色処及法処所摂色」という考え方自体は上述の如くかなり初期の段階において見られるのであり、無表 (avijñpti) という語も『集異門足論』の中に存在する<sup>15)</sup>。この無表については多くの議論があるが<sup>16)</sup>、『成実論』ではどの様に述べるかと言えば、無表(『成実論』では無作とされる)は色法ではなく、行蘊所摂の心不相応行法である<sup>17)</sup>。したがって、さきに掲げた『成実論』の色蘊の定義の中にて「因四大所成法、総名為色」と言われる場合、そこに無表が含まれないことは明らかである。

### III

次に四大と四大所因成法 (= 四大所造色) 及び色香味触の四境 (= 四塵) との関係について考察してみよう。すなわち、先に掲げたうちの「四大者、地水火風。因色香味触故、成四大。因此四大、成眼等五根。此等相触故、有声。」について考えてみたい。

有部では、四大種によって造られたものを四大種所造色と呼ぶ場合に、四大種は実有の能造であるが、『成実論』では地水火風の四大は色香味触の四境を因として成立するとされる。それ故に、「色等是実」<sup>18)</sup>、「四大仮名故有」<sup>19)</sup>とされている。つまり、有部とは異り四大は色等の四境 (= 能造) に対する所造であり、仮有であると考えられているのである。四大から眼等の五根が成立するという点については有部も承認する所である。また、声境について「此等相触故、有声」とあるが、「聞声品」に「但四大若合若離、則有声生」<sup>20)</sup>とされているので、この場合も四大が相触することによって声が生ずるという意味に理解できる<sup>21)</sup>。なお、声境だけが他の四境と区別されている理由は、声が物と物との触れる際に生ずるもので、色香味触の四境の如き本源的な存在とは考えられていないためであろう<sup>22)</sup>。

ところで『成実論』の色蘊の定義は、四大を仮有とする点に特徴があると言えるが、それは本論における「四大仮名品」「四大実有品」「非彼証品」「明本宗品」「無堅相品」「有堅相品」「四大相品」という一連の諸品の中で、四大は実有ではなく仮有であることの論証に多くの力を注いでいることから知ることができる。そこで、もう少し具体的に四大に関する議論を考察してみたい。

### IV

「四大仮名品」に次の様に言う。

四大仮名故有。所以者何。仏為外道故説四大。有諸外道説色等即是大、如僧佉等。或説離色等是大、如衛世師等。故此經定説因色等故成地等大。故知諸大是仮名有。又、經説地種堅及依堅。是故非但以堅為地。又、世人皆信諸大是仮名有。所以者何。世人説見地嗅地觸地味地。又、經中説如地可見有觸<sup>23)</sup>。

ここにまず仏教において四大を説く理由が示される。すなわち、外道のために四大を説くのであり、具体的には色等と諸大とが同一であるとするサーンキヤ派(=僧佉)、或いは、色等とは別に諸大があるとするヴァイシェーシカ派(=衛世師)などに対して、それらの説を否定して、色等を因として地等の四大が成立することを説くことがその理由である。引用文中「此經」とあるのは、おそらく「色名品」の次の經を指すと考えられる<sup>24)</sup>。

問曰、經中説諸所有色皆是四大及四大所因成。何故言諸所有皆是耶。答曰、言諸所有皆是、是定説色相更無有余、以外道人説有五大、為捨此故説四大四大所因成者<sup>25)</sup>。

この「諸所有色皆是四大及四大所因成」という經文は、上述のとおりニカーヤ、阿含に見られる伝統的な色蘊の定義に相当する<sup>26)</sup>。そして『成実論』はこの經文について、「此經定説因色等故成地等大」と説明し、仏教が四大を説く根拠と見做すのである。『大毘婆沙論』では、この經を説く理由を全く別のことと言うのであるが<sup>27)</sup>、少くとも『成実論』としてはこの經文について色等を因として四大が成立することを説くものと理解したのであり、この様な理解が本論における色蘊論の基本にあることは指摘できる。

次に、先の引用文中に地種について「經説地種堅及依堅。是故非但以堅為地。」と述べている点について言及したい。

中阿含經卷7、象跡喩經に地界に関する説明があるが<sup>28)</sup>、それについて水野弘元氏は次の様に言う。

この經説によれば、地界とは、(1)物質の堅い性質又は状態及び、(2)髮毛等の堅い物質の両者を指しているようである<sup>29)</sup>。

(60) 『成実論』における色蘊の定義（荒井）

一方、同じ経文について桜部建氏は以下の様に言う。

この経文だけから、「地界とは物質の堅い性質及び髪の毛等の固い物質の両者を指している」と断ずるのは少し無理でなかろうかと思うが、すくなくとも、ここには具体的な物質から、そのもつ堅湿煖動の性質が、抽象されて考えられようとする跡を見取ることができる。そして、次に述べるように、発達した有部アビダルマは、四大を具体的物質の質料因としてではなくて、むしろ、それら具体的物質のもつ性質と考えるようになるのであるから、この経典がそれに至る過渡の相を示しているとするのは至当である<sup>30)</sup>。

ここに取り上げた議論の争点は、地界とは何らかの具体的な堅い物質のことか、あるいは、堅いという性質のことか、とすることができる。桜部氏によれば、初期の有部アビダルマでは、まだ四大を具体的な物質それ自体と、その物質の有する触覚的な性質と考える二つの考え方が併存していた。その例は『法蘊足論』に見られるが、『品類足論』に到ると前者の考え方はなく後者、すなわち堅湿煖動の性質とする解釈に統一される。それは触処所摂であり、無見 (anidarśana) である。『大毘婆沙論』においてもその傾向はより明瞭となっている<sup>31)</sup>。

話は少し戻るが、『成実論』の「経説、地種堅及依堅」について GOS<sup>32)</sup>では、出典として象跡喩経などを想定している。上述の如くその解釈は両氏の間には相違があり、経文の内容自体も極めて微妙と言うべきかも知れない。また、想定される経典が正しいか否かという問題もあるが、ここで確認すべきことは『成実論』がある経文を根拠として、地種とは堅 (= 堅という性質) と依堅 (= 堅い物質) との両者のことであると考えている点である<sup>33)</sup>。「是故非但以堅為地。」と述べていることからその点について間違いはないと思われる。そして、「世人説見地嗅地触地味地。」や、「経中説如地可実有触。」と述べることによって、地種とは有部の主張する堅という性質ではなく、目に見えたり手で触れたりすることのできる具体的な物質であることを強調する。

では、『成実論』が地種とは堅という性質と堅い物質の両者であると言う場合の、堅の性質とはどの様にとらえられているのだろうか。本稿のIIに示した色蘊の定義の中に次の様にある。

地者、色等集会、堅多故名地。如是湿多故名水。熱多故名火。輕動多故名風<sup>33)</sup>。

この記述から、四大はすべて色等が集合した仮有のものであり、そのうち堅の性質の多いものを地と名づけ、同様に湿、熱、輕動の性質の多いものを、順に水、火、風と名づけると言っていることが知られる。つまり、そもそも仮有の法である以上、それを構成する色等の他に有部の考える堅湿煖動という実有の不可見なる触処所攝の性質がある訳ではなく、あくまでも相対的に堅いか軟いか、水分が多いか少ないかという極めて素朴な観点から述べられたことと理解できよう。「有堅相品」に以下の様に言う。

汝言堅軟相待故無定者、是事不然。如長短等相待亦相。又、如嘗白石蜜味、以黒石蜜為苦、嘗呵梨勒味、以黒石蜜為甘。若以相待故無、則味亦無<sup>34)</sup>。

この記述からも、『成実論』における堅等の性質の意味は我々が日常ごく普通に経験する範囲における相対的な感覚に基くものであるとすることができる。

以上の考察によって『成実論』の地種の理解は、堅という性質と堅い物質の両者のことであり、また、堅という性質は極めて日常的な相対的な感覚に基くものであることが明らかになったと思われるが、この様な理解に対して、有部の立場からは次の様な反論が為されている。

經中仏二種説、堅依堅、湿依湿等。故知堅是実法、依堅是仮名。余大亦如是。是故堅等是実大。依堅法以随俗故名大。故有二種大。亦実亦仮名。又、阿毘曇中説、形処是地、堅相是地種。余大亦爾<sup>35)</sup>。

これは『俱舍論』の界品、偈(13)に見られる、地と地界との区別の問題に相当する<sup>36)</sup>。有部では、堅という性質は実有の法であり、それを地種と規定する。これは不可見である。一方、色や形を持つ目に見える物質のことを地と呼び、地種と区別する。すなわち、前者が実有の大であるのに対して、後者は仮有であり、ただ世間一般の呼び方として地とされているものである。

この様に、有部の立場からは堅と依堅とは厳密に区別されなければならない。しかし、『成実論』は次の様に主張するのである。

如經中說、是身中有髮毛爪等、以是故、髮毛爪等是地種。不以有種語故名為実法<sup>37)</sup>。

既にくり返し述べてきた如く、髮毛爪などの具体的な物質として堅いものを地種と見做していることは疑問の余地がない。更に、「種」の語が有るからといって、それが実有の法を指すのではないと述べて、有部の立場を批判している。では何故、『成実論』は地種を具体的な物質と見做すことにこだわるのであろうか。それは、經にその様に説かれているからという理由であると思われる。水野弘元氏によれば前述した象跡喩經などの様に、地界に堅という性質と堅い物質の両者を含むものがある一方で、大衆部系の増一阿含の中には地界は具体的な物質のことであって堅という性質を全く説かない經もあると言う。また、象跡喩經の如き上座部系の阿含も元来は単に髮毛等を地界の意味としていたのではないかと言う<sup>38)</sup>。つまり、堅湿煖動という性質を地種の解釈に持ち込んだ有部のアビダルマに対して、『成実論』はあくまでも元来の阿含の記述を忠実に守ろうとしたと考えられるのではなかろうか。

## V

最後に『成実論』の色蘊の説明中の「因色香味触故、成四大。」の部分について更に考察してみたい。本稿の中ですでに筆者は、この様な四境から四大が生ずるという理解が『成実論』における色蘊論の基本にあることを指摘したのであるが、若し、この四境が単に有部の主張するところの四大種に代わる実有の能造の役割を担うものであるとすれば、論理的構造として両者に何ら相違はないことになる。そこで、色等の生起のあり方について述べている次の様な記述に注目してみたい。

汝説色等從四大生、是事不然。所以者何。色等從業煩惱飲食婬欲等生。如經中說、眼何所因、因業故生。又説、貪樂集故色集。又如阿難教比丘尼言、姉是身從飲食生、從愛慢生、從婬欲生。故知色等非但從四大生<sup>39)</sup>。

ここに、色等は業や煩惱や飲食や婬欲などから生ずると言われている。『成実論』においてこれはどの様な意味を持つのであろうか。本論が四諦説に基いて構成されていることは既に述べたとおりである。では、四諦の内容について次の記述を見



てみよう。

五受陰是苦、諸業及煩惱是苦因、苦尽是苦滅、八聖道是苦滅道<sup>40)</sup>。

すなわち、五取蘊 (= 五受陰) が苦諦であり、諸業及び煩惱が苦の因、つまり集諦である。「業相品」にも次の様にある。

集諦者、諸業及煩惱。是業有三種。身業口業意業<sup>41)</sup>。

ここに、集諦とは諸業及び煩惱と言ひ、諸業は身口意の三業を指す。また、煩惱については「煩惱相品」に以下の様に言う。

論者言、已説諸業、諸煩惱今当説、垢心行名為煩惱。問曰、何謂為垢。答曰、若心能令生死相續、是名為垢<sup>42)</sup>。

つまり、煩惱 (= 垢) によって心が生死を相續させることになり、煩惱のある限り生存の苦しみから逃れることはできないのである。

以上の様な四諦の内容、特に苦諦と集諦の内容を整理すれば、次の様になる。すなわち、色識想受行という五蘊<sup>43)</sup>が苦諦であり、身口意の三業という業と貪など煩惱が集諦であり、煩惱は輪廻の根本の原因である。

そこで先ほどの、「色等は業や煩惱などから生ずる」という記述について言えば、色等は苦諦、業や煩惱などは集諦に相当し、まさに集諦は苦諦の因であるという四諦説の構造を表していると言える。したがって、四境から四大が生ずるという場合、四境は決して有部の四大種の如き性格の能造ではない。

更に筆者が別稿で論じた如く、五蘊の順序が色識想受行として説明される理由が煩惱生起の次第を示すためであったとすれば、色から煩惱が生じ、そして煩惱から色が生ずるという無限の繰り返しを意味することになる。その無限の繰り返しを断ち切るために、滅諦と道諦が説かれる訳であるが、『成実論』に見られる色蘊論は四諦説の苦諦と集諦のメカニズムに沿って述べられていることが明らかである。

(64) 『成実論』における色蘊の定義 (荒井)

注

- 1) 拙稿「『成実論』における五蘊の順序」、『駒澤短期大学仏教論集』第4号、1998年10月、pp.29-38 (横)。
- 2) 玄暢作「訶梨跋摩伝」、『出三蔵記集』巻第11 (大正蔵50、78中-79中)。なお、新国訳大蔵経、毘曇部6、『成実論I』、大蔵出版、1999年、pp.10-11を参照して頂きたい。
- 3) 問曰、汝先言当説成実論。今当説何者為実。答曰、実名四諦。(大正蔵32、260下28-29)。なお、『成実論』の原題名については、注1)所掲の拙稿P.36の注4を参照して頂きたい。
- 4) 池田練成「『成実論』における煩惱論の構造」、『曹洞宗研究員研究生研究紀要』16、1984年、P.70参照。
- 5) 五陰実無、以世諦故有。所以者何。仏説諸行尽皆如幻如化。以世諦故有、非実有也。又、経中説第一義空、此義以第一義諦故空、非世諦故空。第一義者、所謂色空無所有、乃至、識空無所有。是故若人觀色等法空、是名見第一義空。(大正蔵32、333上8-13)。
- 6) 大正蔵32、261上8-17。なお、筆者はすでに別の観点から『成実論』の色蘊に関する議論を扱った(拙稿「三論宗と『成実論』に関する一考察」、平井俊榮博士古稀記念論文集『三論教学と仏教諸思想』、春秋社、2000年10月刊行予定に掲載の予定)が、その内容上本稿と多少重複する点のあることをご了承頂きたい。
- 7) 水野弘元「仏教における色(物質)の概念について」、宇井伯寿博士還暦記念論文集『印度哲学と仏教の諸問題』、岩波書店、1951年、p.481, ll.9-11 (この論文は、水野弘元著作選集第2巻『仏教教理研究』、春秋社、1997年、pp.343-363に再録されている)を参照。また、桜部建『俱舎論の研究』、法蔵館、1969年、p.93, l.15-p.94, l.14において、阿舎に見られる色法の定義として、(1)壊れるから色と言われる (*rūpatiti kho tasmā rūpaṃ*, S22-79 etc.)、(2)色は四大種と四大所造とである (*cattāri ca mahābhūtāni catunnañ ca mahābhūtānāṃ upādāya rūpaṃ*, S22-57 etc.)という二つを挙げるが、(1)は色だけでなく有為法一般の性質を示すものであるから、(2)によって色法自体のもつ最も基本的な規定が与えられる、と述べられている。
- 8) 『国訳一切経』論集部3、宇井伯寿訳「成実論」、P.107、注99、及び、福原亮巖『成実論の研究』、永田文昌堂、1969年、P.161を参照。なお、サンスクリット還元テキスト、N. Aiyaswami Sastri, *Satyasiddhiśāstra of Harivarman*, Vol. I, Gaekwad's Oriental Series No. 159, Baroda, 1975 (以下、GOSと略す) p.96, l.15には、「四大所因成法」が、*catvāri mahābhūtāny upādāya dharmāḥ*と還元されている。

- 9) 大正蔵26、412上15-19。
- 10) 大正蔵26、692中21-24。
- 11) 大正蔵27、383上24-中1。
- 12) 直前に引用した『大毘婆沙論』の記述中の省略した部分が、「余経復説、云何色蘊、諸所有色、若過去若未来若現在、若内若外、若鹿若細、若劣若勝、若遠若近、如是一切略為一聚、説名色蘊、乃至、識蘊広説亦爾。」というものであり、したがって、(1)契経、(2)余経、(3)阿毘達磨という3説が併記されていることになる。(1)契経の記述は、中阿含経卷7、象跡喻経（大正蔵1、464下3-4）、雑阿含経卷3、61経（大正蔵2、15下15-16）、中阿含経卷7、大拘絺羅経（大正蔵1、463下26）、雑阿含経卷2、58経（大正蔵2、14下11-13）などの中に確認することができる。(2)余経の記述は、雑阿含経卷2、58経（大正蔵2、14下4-7）、同、55経（大正蔵2、13中15-18）などの中に確認することができる。『成実論』の「二世有品」（大正蔵32、252中14-16）に、この記述が有部の三世実有論の根拠として引用されている。
- 何故3説を挙げているのかという理由は、『大毘婆沙論』によると、(1)は四大種以外に四大種所造というものはないとする覚天の主張を否定するため、(2)は三世のうち現在のみがあり過去と未来はないとする外道の杖髻（Lagūḍaśikhīyaka）の主張を否定するため、(3)は法処所撰の諸色を認めない譬喩者（ここでは法救など）の主張を否定するためであると言う（大正蔵27、383中1-26）。なお、覚天の「四大種外無別所造」の主張は『大毘婆沙論』の別の箇所（大正蔵27、661下17-23）にも取り上げられているが、それと同じ内容の主張が『順正理論』（大正蔵29、356中21-24）において、譬喩論師の主張として批判されている。
- 13) Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu, Pradhan edition, Patna, 1967（以下AKBhと略す）、p. 5, 1. 22.
- 14) 大正蔵29、2中7。なお、誤解のない様に申し添えれば、『俱舍論』が(3)阿毘達磨の説のみを採ったからと言って、(1)、(2)の説に関して論じていないという訳ではなく、四大種については界品の偈(12)-(13)において論じており、また(2)の余経は三世実有論及び無表色の実在を説明する重要な根拠として引用されている。
- 15) 大正蔵26、452下27、453上4-5、453上11-12。
- 16) 舟橋一哉『業の研究』、法蔵館、1954年、pp. 98-161、袴谷憲昭「選別学派と典拠学派の無表論争」、『駒澤短期大学研究紀要』第23号、1995年3月、pp. 45-94（横）など。
- 17) 問曰、已知有無作法非心。今為是色、為是心不相応行。答曰、是行陰所攝。所以者何。作起相名行。無作是作起相故。色是惱壊相、非作起相。（大正蔵32、290中9-12）、及び、は無作中惱壊相不可得故、非色性。（同、16-17）。

(66) 『成実論』における色蘊の定義 (荒井)

18) 大正蔵32、263上15。

19) 同上、261上23。

20) 同上、270下7-8。

21) 「此等」を四大と五根と解釈するものに高雄義堅『三論玄義解説』、興教書院、1936年、p.190、所理恵「『三論玄義』における『成実論』批判」、『仏教学会報』13、1987年、p.44などがあるが、筆者は四大のみを指すと理解したい。ちなみに、前注8)のGOSの英訳には“The sound is produced from the mutual contact of the four great elements” (N. Aiyaswami Sastri, Satyasiddhiśāstra of Harivarman, Vol. II, English translation, Gaekwad’s Oriental Series No. 165, Baroda, 1978 (以下、GOS(E)と略す) p. 75, l. 27) とある。

22) 福原亮巖『有部阿毘達磨論書の発達』、永田文昌堂、1965年、pp. 315-316を参照。有部においても声は四大の接触によって生ずるとする点に相違はないと思われるが、例えば『雜阿毘曇心論』には(1)咽喉唇舌因縁発声、(2)風鈴樹等因縁発声、(3)撃鼓吹貝因縁発声という、3種に各々、可意と不可意があり合計6種とされる(大正蔵28、872下3-6)が、『俱舍論』では合計8種とされ、上述の(3)の声については承認できないとしている(AKBh p. 6, l. 23-p. 7, l. 1, 大正蔵29、2下11-19)。

23) 大正蔵32、261中13-20。

24) 『国訳一切経』論集部3、p.109、注109を参照。

25) 大正蔵32、261上19-23。

26) 前注7)を参照して頂きたい。

27) 前注12)を参照して頂きたい。

28) 謂内身中在、中所摂堅、堅性住、内之所受。此為云何。謂髮毛爪齒龜細皮膚肌肉筋骨心腎肝肺脾腸胃糞。如是此、此身中、余在内所摂堅、堅性住、内之所受。諸賢、是謂内地界。(大正蔵1、464下6-10)。

29) 前注7)の水野論文、p. 481, l. 12-p. 482, l. 1.

30) 前注7)の桜部書、p. 95, ll. 9-14.

31) 同上、p. 95, l.15-p. 96, l. 12を参照。

32) GOS, p. 99, n.15.なお、この略号については前注8)を参照のこと。

33) GOS, p. 99, l. 10には、堅、依堅をそれぞれ、khakkhaṭṭa、kharagataと還元している。

34) 大正蔵32、264上20-24。

35) 同上、261下21-25。なお、引用經典の出典についてはGOS, p. 101, n. 29を参照のこと。

36) pṛthivī varṇasamsthānam ucyate lokasamjñāya / āpas tejaś ca vāyus tu

dhātur eva tathāpi ca (ch. 1, k.13, AKBh, p.9, ll.1—7).

37) 大正蔵32、263上10—12。

38) 水野前掲論文、p. 482, ll. 2—5 を参照。なお、元来阿含経は地界を物質的な存在と見做していたという見解は、桜部前掲書、p. 94, l. 15—p. 95, l. 5 にも示されている。

39) 大正蔵32、262中2—7。なお、引用経典及び関連する記述については、GOS, p. 104, n. 41—43 を参照のこと。

40) 大正蔵32、261上1—2。

41) 同上、289下15—16。

42) 同上、308下27—29。なお、『成実論』の煩惱論について、池田練成氏は次の様に指摘する。「四聖諦という、迷妄の状態から理想の境地への流れの中で、煩惱論もまた把えられているのである。このような著述上の特徴は、煩惱論を理解する上で決して見過してはならない点である。」この指摘は『成実論』全体の理解においても極めて重要なものとする。前注4) 所掲の池田論文、p. 69を参照。

43) 前注1) を参照のこと。

(1999年7月9日脱稿)